

中国朝鮮族学校言語教育の多様性に関する社会言語学的研究 —大連市朝鮮族学校及び華東朝鮮族週末学校の事例を中心に—

新井保裕
文京学院大学

1. はじめに

中国朝鮮族（以下、朝鮮族）は、中国の 55 の少数民族のうちの 1 つであり、19 世紀中頃に、朝鮮半島から中国東北地方に本格的に移民を開始したと言われる。その後、朝鮮と中国において日本の植民地支配・占領があり、1945 年に解放された後も 112 万人が中国に留まることを選んだ（高崎 1996）。2010 年現在、中国には 183 万人の朝鮮族が住み、吉林省に 104 万人、黒龍江省に 33 万人、遼寧省に 23 万人と、東北三省に 87% にあたる 177 万人が集中している（2010 年第 6 次全国人口普查）。特に吉林省は 1952 年に延辺朝鮮族自治州（以下、延辺）が成立し、74 万人の朝鮮族が在住していることで知られる（吉林省 2010 年人口普查）。

朝鮮半島にルーツを持ち、朝鮮語と中国語のバイリンガルと一般的に考えられる傾向のある朝鮮族は、学術的に注目を集め、歴史学や人類学、社会学、言語学など様々な観点から多くの研究が行われてきた。しかし、これまでの朝鮮族研究は延辺に在住する者を対象とすることが多く、他の地域にはあまり目を向けられていないのが実情であるほか、複数地域を比較した研究は決して多くない。昨今は移動の時代に突入しているが、朝鮮族は中でも特に国内及び国外移動が多く、移動性を特徴とすることで知られる。そうした移動性ゆえに朝鮮族の在住地域も多様化しており、彼らを取り巻く環境も、それに伴う意識や様式も異なり得るため、中国朝鮮族の学術的理解のためには複数地域を比較調査する必要性があると言える。

そこで本稿では、朝鮮族の意識や根幹に大きな影響を与えると考えられる言語教育に焦点を当て、複数地域の比較研究を行う。従来の朝鮮族研究では歴史や生活、文化、社会構造、民族意識などに焦点を当てられることが多く、言語教育についても教育政策というマクロな部分が扱われる傾向があったが、朝鮮族の分散に伴い、実際の言語教育現場である学校を対象とした研究が人類学を中心に増えつつある。本稿も学校というミクロな部分に注目して、朝鮮族の言語教育研究を行う。人類学を中心とした既存の研究では、研究の性格上、言語教育は部分的に扱われるが、本稿では朝鮮族の言語教育を主対象に社会言語学的観点から研究を試みることで、朝鮮族言語教育と社会の関係を明らかにする。その事例として、中国内朝鮮族の新たな居住地として浮上している大連市の大連市朝鮮族学校と他朝鮮族コミュニティ、同様に近年

朝鮮族の流入が起こっている上海市の華東朝鮮族週末学校を中心に扱う。この二地域は南北それぞれにおける国際都市、経済都市と知られ共通点が多く、新たに移住した朝鮮族を取り巻く環境も類似しているものと考えられる。しかし実際には言語教育の形態が大きく異なる。この二地域を分析することで、言語教育の背後に潜む社会的要因を究明できると期待される。さらに他地域の学校についても、先行研究から取り上げ、比較研究することで、中国朝鮮族学校言語教育の多様性をより明瞭な形で明らかにし、その社会的背景について記述的及び理論的考察を行う。

2. 先行研究

本節では朝鮮族の言語教育を扱った先行研究を概観する。

朝鮮族の歴史、生活、文化などを概観する研究として高崎(1996)、黄有福(2012)があり、その一部で言語・民族教育も扱われるが、研究の性格上、概説に留まる。李塚畛(1998)は延辺を中心に、朝鮮族の教育文化史に注目し、教育政策を論じている。また小川(2001)は中国における少数民族教育政策を扱い、朝鮮族についても、小中学校における言語教育制度や、言語理解の実態、大学入試制度を取り上げている。尹貞姫(2005)、花井(2011)では中国朝鮮族学校の教育課程に注目し、それぞれ論じている。ただし李塚畛(1998)以下の上記研究はいずれも延辺を対象にしており、また政策面に注目が集まっているため、実際の教育現場である学校でどのような教育が行われているかは明らかでない部分がある。

一方、韓景旭(2001)はさまざまな朝鮮族社会でフィールドワークを行い、文化人類学の見地から分析している。その中で、延辺の朝鮮族とそれ以外の朝鮮族では意識や生活様式に異なりがあることが、調査対象者のインタビュー回答の中で示唆されている。前述の朝鮮族の移動性を踏まえても、中国各地域に分散する朝鮮族の言語教育には異なりがあることが考えられ、比較研究が必要であることがわかる。

このような先行研究の中でも、高崎(1996)はさまざまな地域の朝鮮族の歴史・生活・文化・民族教育を概観しており、そのうち本稿の主対象である大連市についても言及している数少ないものである。しかしその記述は非常に少なく(同書:208-211)、朝鮮族学校と朝鮮族文化会館を紹介するのみとなっている。本稿においても一つの主対象である上海市については、近年の朝鮮族の移動と共に関心が高まり、花井(2014)、権艶美(2017)が週末学校を調査分析しているほか、校長の論考である박창근(2015)がある。これらの先行研究については4節で適宜紹介する。

延辺以外の他地域の言語教育に注目した研究として岡本(1999)や박갑수(2013)があり、言語教育に関するデータを提示しているが、政策面への注目が大きく、現場における言語教育の実際については不明な部分が多か

った。しかし、高木(2020)は中国東北三省（吉林省延吉市、黒龍江省哈爾濱市、遼寧省瀋陽市）における朝鮮族学校の現状報告を行い、「朝鮮族学校は依然として民族教育機関としての一側面を維持しながらも、中国の教育制度や大学入試制度、近年の社会変化の影響を多分に受けた学校運営を行っていること」を明らかにした。ただその多様性及び背景については十分に明らかになっていない。また、前述の通り、近年、学校をフィールドにした人類学的研究が増え、趙貴花(2016)は北京市における言語教育の事例を、南玉瓊(2018)は青島市、燕郊鎮、三河市における事例を扱っている。人類学的見地から調査された各地域の言語教育に関する事例も、本稿の主対象である大連市、上海市に加えて、5節で紹介し比較する。

以上のように、近年、朝鮮族の移動に伴い、その数が増えつつあるとはいえ、延辺以外における朝鮮族を扱った研究は少なく、また言語に注目して、実際の言語教育の研究を志向したものは非常に限られている。そこで本研究では、筆者らが実際に調査を行った大連市朝鮮族学校、華東朝鮮族週末学校の事例について論じ、他地域の事例と比較しながら、中国朝鮮族言語教育の多様性を明らかにする。そしてその多様性の背景にあるものを社会言語学的観点から探っていく。

3. 大連市朝鮮族学校

まず大連市朝鮮族学校の事例を見る。中国遼寧省にある大連市は中国東北地域最大の経済都市として知られる¹⁾。生活水準の高さゆえに以前の朝鮮族は住めなかったが、朝鮮族の経済的地位が向上し、現在は大連在住の朝鮮族が増えている。1986年には4000人に過ぎなかった大連地域朝鮮族人口が2010年（第6次全国人口普查）では23000人余りに集計され、2000年の第5次全国人口普查より約10000人多い（【ZOGLO】）。不完全な統計に従えば大連地域朝鮮族人口はすでに7~8万人、あるいは10万人余りに到達して、大連市は中国内朝鮮族の新たな居住地に浮上している（【ZOGLO】）。

しかしこうした状況にもかかわらず、大連市の朝鮮族を扱った研究は非常に限られている。朝鮮族の新たな居住地となっている大連市においても、古

1) 本節において引用元が特に記載されていないものは大連市朝鮮族学校で2016年3月に実施したインタビューによるものである。他朝鮮族コミュニティでもインタビュー調査を実施し、それらの結果も引用するが、その際は新聞記事と共に次のように略記する。またインタビューは全て朝鮮語で実施したことも付け加えておく。

・インタビュー

【大外】…大連外国語大学教員、【泡崖】…泡崖朝鮮族老人協会、【文化】…大連市朝鮮族文化芸術館、【老人】…大連市朝鮮族老人協会

・新聞記事

【ZOGLO】…조글로미디어 2016年1月3日『력사전환기속 료녕성내 조선족지역사회탐방 [대련편] (歴史転換の中の遼寧省朝鮮族地域社会探訪 [大連編])』

くから朝鮮族学校があり朝鮮語を始めとする言語教育が実施されているが、その詳細を記述した研究は皆無である。そこで本節では、2016年3月に筆者らが大連市朝鮮族学校、及び他朝鮮族コミュニティで実施したインタビュー調査や見学をもとに、大連市朝鮮族学校の言語教育について現状と背景を述べる。

3. 1. 大連市朝鮮族学校概況

大連市朝鮮族学校は大連市教育局の直接管轄に属する全日制の公立学校であり、教職員の給与は国家から支給されている。創立は1946年4月20日であり、当初は小学校のみであったが、1998年に初級中学、2001年に高級中学が設立された²⁾。現在は、学前班から小学校、初級中学、高級中学まであり、合計14クラスとなっている³⁾。なお1クラスの学生数は20~50人であり、合計の学生は400人程度である。そのうち韓国学生が20名、漢族学生も4~5人程度が在籍している（【ZOGLO】）⁴⁾。教員数は常勤の者が45人で、それに加えて非常勤教員が若干名在籍しているが、漢族も朝鮮族もいる。一方で事務職員数は20人で全て漢族から成っている。

3. 2. 朝鮮語・中国語バイリンガル教育

朝鮮族を中心に、韓国人や漢族の学生が在籍し、教職員も漢族と朝鮮族が在籍する大連市朝鮮族学校であるが、そこではどのような言語使用が成されているのだろうか。学校で朝鮮語と中国語がどのように用いられているのかについて本節では述べていく。まず科目としての朝鮮語と中国語に注目する。両授業はそれぞれ朝鮮語と中国語で実施されるが、大連市朝鮮族学校における朝鮮語と中国語の授業時間数（週当たり）は以下表1の通りである。一方で、先行研究で示された、延辺朝鮮族学校における朝鮮語と中国語の授業時間数（週当たり）は表2のようになる。表1と表2を比較すると、大連市朝鮮族学校は、朝鮮語と中国語の授業のうち朝鮮語の授業比率がどの学年も50%前後を推移しており、学年によって30%から100%まで分布する延辺朝鮮族学校と比べて、朝鮮語と中国語の授業時間数に均衡がとれていることがわかる。

朝鮮語と中国語以外の授業に注目すると、小学校では、英語と中国語を除く授業で朝鮮語を教授言語として使用する一方で、中学校では教授言語が朝鮮語と中国語半々になるとのことである。また高級中学からは、日本の「国

2) 中国の初級中学、高級中学はそれぞれ日本の中学校、高等学校に該当する。

3) 中国の学前班は日本の幼稚園に該当する。

4) 学生は学校で朝鮮語を学んでいるが、保護者は朝鮮語を使用できるとは限らないため、保護者用の学級用文書は朝鮮語と中国語のものを両方用意しているという。

語」に相当する中国語文の授業もあり、中国語水準も高いという⁵⁾。なお筆者らが高級中学 2 年生の授業見学を行った限りでは、学生への呼びかけや談話標識で朝鮮語を用いる以外は、教員は中国語で教材説明や補足を行っていた⁶⁾。なお調査実施時の 3 月は高級中学卒業認定試験前であったため、中国語で授業を実施していたとのことである⁷⁾。

また授業で使用する教科書については小学 1 年から初級中学 2 年までは延辺の教科書を用いず、漢族学校と同じように大連市発行のものを使用するという。ただし朝鮮語は延辺のものを用いる。朝鮮語や中国語の授業以外の科目において、朝鮮語で書かれた使用に足る教科書もあるが、中国語の方が、1 文字あたりの情報量が多い漢字が用いられるため、本は薄く、学生の理解が早いとのことである。

表 1 大連市朝鮮族学校における朝鮮語と中国語の授業時間数⁸⁾

学校	小学校						初級中学			高級中学		
学年	1	2	3	4	5	6	1	2	3	1	2	3
朝鮮語	8	6	6	6	7	7	5	5	6	5	4	7
中国語	7	7	6	7	6	6	6	6	6	5	4	7
朝鮮語 比率(%)	53.3	46.2	50.0	46.2	53.8	53.8	45.5	45.5	50.0	50.0	50.0	50.0
(参考) 英語	3	3	3	3	3	3	6	6	7	6	6	8

5) 表 1 の中国語の授業時間数に含まれるものである。

6) 「그 다음에 (その次に)」, 「그러니까 (だから)」, 「그렇지(요) (そうでしょう)」, 「아니라 그랬잖아요 (そうじゃないと言ったじゃない)」, 「뭐라고요? (何ですって?)」のような学生に呼びかける表現, 談話標識や「읽어(요) (読みましょう)」のような命令, 勧誘表現で朝鮮語が多く用いられた。

7) 対照的に高級中学 3 年次には、全国大学統一入学試験で少数民族として優遇され加点採点してもらうために、朝鮮語で入試を受ける訓練を集中的に行うという。

8) 大連市朝鮮族学校提供の資料をもとに筆者が作成した。新井他(2019)にも掲載されている。

学校	小学校					初級中学			高級中学		
学年	1	2	3	4	5	1	2	3	1	2	3
朝鮮語	13	8~9				4	4	4	3	3	3
中国語	0	6				6	6	5	6	5	5
朝鮮語 比率(%)	100.0	57.1~60.0				40.0	40.0	44.4	33.3	37.5	37.5

次に、授業以外の、学校における朝鮮語・中国語の使用を見る。まず校内試験の問題用紙、答案用紙は朝鮮語と中国語の2種類が用意されており、内容理解ではなく言語能力の不足による成績評価の不利が生じないようになっている。また学校内の案内や標識に注目すると、朝鮮語のものと中国語のものが混在しているが、同一内容を2言語で併記しているわけでは必ずしもない。両言語を理解していないとその案内内容がわからない中で、学生は朝鮮語、中国語の両言語を学習していると言える。例えば、校内のモニターでは毎日ことわざ、慣用句が紹介されているが、調査日当日、朝鮮語では「마음은 굴뚝 같다 (心は煙突のようだ=何かをやりたくてたまらない)」という慣用句が紹介されている一方で、中国語では「凡事预则立，不预则废 (全てのことは事前に準備をすれば成功し，準備をしなければ失敗する)」という論語のことわざが紹介されていた。また階段の蹴込み板部分にも朝鮮語、中国語、英語で標語が記載されていたが、いずれも別内容のものであった。

授業時間外の学生たちの言語使用に関しては、学生たちは朝鮮語のできる教員には朝鮮語、学生間や朝鮮語のできない教員に対しては中国語を用いるようである¹⁰⁾。また学前班で事前学習を行うため、小学校入学時よりある程度朝鮮語ができるという。

ここまで大連市朝鮮族学校において朝鮮語・中国語がどのように使用され

9) 菅野・長(1983), 박갑수(2013)で提示されたデータをもとに筆者が図表化した。表1との比較を行う上では英語の学習時間数も表に含めるべきであるが、英語の時間数についてはデータを得ることができなかったため、朝鮮語と中国語の時間数のみとしている。また本データは文化革命以降の1980年代の時間表であり、2020年秋に実施されたカリキュラム改訂で朝鮮族学校の各言語学習時間数にも変更があったが、その点については本稿では考察できていない。今後の課題としたい。

10) 新井他(2019)では、朝鮮族の言語使用には性別差があり、男性は中国語志向、女性は朝鮮語志向を持つことが示されている。2017年9月に筆者らが大連市朝鮮族学校の学生に対して実施したインタビューでも、男子学生は「携帯電話のゲームやスポーツ、そして学校の外で中国語を用いる」のに対して、女子学生は「韓流の影響で朝鮮語を用いる」という回答が得られ、男女の趣向に起因した性別差が示唆されている。

ているかを、学校での調査・見学から見てきた。他朝鮮族コミュニティからの評価に目を向けると、「朝鮮族学校は朝鮮族が通う学校というより朝鮮語を学ぶ学校」(【泡崖】)という意見が得られた。表 1・2 でも確認したように、大連市朝鮮族学校では中国語に対する朝鮮語の授業比率が延辺のそれよりも高い。一方で朝鮮に関連する授業は朝鮮語と朝文字という言語に関する 2 科目のみであり¹¹⁾、歴史や政治の授業では中国のそれが教授されている。朝鮮語の位置付けは「国語」よりも、英語に代表される「外国語」に近いと考えられる¹²⁾。表 1 に見られるように、英語の授業時間数も高級中学では朝鮮語や中国語に匹敵するものである。漢族学生、韓国学生が在籍することと合わせて考えても、「朝鮮族学校は朝鮮族が通う学校というよりも、外国語として朝鮮語や英語を学ぶ学校」(下線部分は筆者が追加)と言えるものであり、大連市朝鮮族学校においては非常に説得的な特徴であるかもしれない。

大連市朝鮮族学校は「民族の特色を生かしたい」と同時に「生徒の個性を生かしたい」と考えている。先に述べたように、大連市朝鮮族学校では小学校 1 年から初級中学 2 年までは延辺の教科書を使わず、漢族学校と同じように大連市発行のものを用いて、延辺とは異なる教育を行うのも、こうした考えの一端であろう。上記のような教育を学校で実施した結果、生徒の個性を生かして学力を伸ばし、「北京大学や復旦大学など、中国の重点大学に卒業生を輩出」しているという(【ZOGLO】)。また中国の重点大学への進学に失敗した際に、韓国や日本の大学への留学を志向する場合も多く、朝鮮族学校で朝鮮語を学習した方が、朝鮮語を用いる韓国や朝鮮語と類似した日本語を用いる日本への留学に有利であると見る考え方もある¹³⁾。

このように、大連市朝鮮族学校では、延辺とは異なる大連独自の教育を志向し、言語の面では高水準の朝鮮語・中国語バイリンガル教育を実施していると言える¹⁴⁾。

11) 「朝文字」とは朝鮮語の習字や作文を教授する授業科目であり、大連市朝鮮族学校では小学校 2~6 年の間、週に 1 コマずつ教えられている。これは表 1 記載の朝鮮語の授業とは別に行われている。

12) 本稿査読者より、「中国の民族学校で教授されている言語は「国語」と「外国語」という括りでは扱えず、例えば延辺における朝鮮語はそのどちらでもない立ち位置である」という意見を頂戴した。本稿では授業時間数や他の開講科目に注目し、朝鮮語の位置付けが、中国語より英語という「外国語」に近いと結論づけているが、その科目内容詳細や教員、学生の言語意識なども含めて考察する必要があると考える。今後の課題としたい。

13) 大連理工大学副教授・孫蓮花先生のご教示による。なお大連市朝鮮族学校では日本語教育は行われていないが、朝鮮語能力を活かして日本語を学ぶ学生が一定数いるようである。本調査実施時も、日本から来た筆者らに、日本留学を考えていることを伝えてきた学生がいた。

14) 大連市朝鮮族学校では、朝鮮語の授業で延辺の教科書を用いることからわかるように、北朝鮮の朝鮮語が教授される。しかし注 10 にあるように、女子学生は韓流の影響を受け、韓国の標準語にも接触し、新井他(2019)で示されているように他地域に比べて比べ

3. 3. 大連市在住朝鮮族の背景

3. 2 節では大連市朝鮮族学校の言語教育を概観したが、延辺とは異なり、大連市独自の教育を志向していることが明らかになった。それではなぜ大連市でそうした教育が実施されている、あるいは実施できているのか、大連市在住朝鮮族の背景からその理由を探る。

大連市は国家から直接予算が下りる経済都市であり、韓国企業も多く誘致しているが（【文化】）、そうした大連市では朝鮮語を知っていることがメリット化しているのではないかと考えられる（【大外】）。第一にそうした経済的優位性が大連市朝鮮族の言語教育を支えている可能性を示唆できる。

また大連市には他の少数民族の学校はなく、国営の朝鮮族文化会館¹⁵⁾があるのも東北三省だけであり、さらに 55 の少数民族の中で学校、文化会館があるのは東北三省で朝鮮族が唯一であるという（【文化】）。大連市で開催される最も大きな朝鮮族の行事として、年に 1 度開催される朝鮮族民族文化芸術節を挙げることができるが、他民族は基礎がないため朝鮮族だけが開催している（【文化】）¹⁶⁾。このように施設、行事の面を見ても大連市の朝鮮族は文化的に恵まれていることがわかる。

今回実施したインタビュー調査では大連市に関して、「東北三省最大の都市で人気がある」、「瀋陽より住みやすく第二の故郷である」（【老人】）、「夏は暑すぎず、冬は寒すぎずたいへん住みやすい」（【泡崖】）、「東北三省で最も教育水準が高い」と大連市を肯定的に評価する意見が多く見られた。前述の結果と共にまとめると、大連市は東北三省内で経済的、文化的、気候的、教育的に優れていると考えられ、朝鮮族にとって住みやすい環境であると言える¹⁷⁾。また延辺と同じ東北三省に位置するという近接性も大きな要因であるだろう。これらの優位性が朝鮮族の大連市への移動や在住を促進し、彼らの言語教育を支えているのかもしれない。

なおかつては子を祖母に預けて両親が出稼ぎに行くというのが一般的であったが今は異なる。親世代がさまざまな地域から大連市に移住するのに祖父母世代がついていき、必要な時に面倒を見てくれ、普段は気楽なように別居するという。大連市郊外にある泡崖でも、親世代以下は大連市に住み、祖父母は家賃のより安い泡崖に住んで、会いたいときに孫に会いに行くという回答があった。その子世代が大連市の朝鮮族学校に通っている。大連市朝鮮

て大連市の朝鮮族学校はソウルのことばを志向する傾向が強い。そして韓国への留学を志す場合もあるのだろう。

15) 1953 年に設立され、大連市朝鮮族伝統文化の継承発展と健全な文化芸術の定着を目的としている（提供パンフレット掲載の朝鮮語部分を筆者が翻訳）。

16) 他少数民族を例にとると、モンゴル族は移動民族のため、基礎がないという（【文化】）。

17) 大連理工大学副教授・孫蓮花先生によると、大連市は沿海都市で交通が発達しており、韓国との交通も便利であるという「地理的要因」も考えられるという。

族学校は市内にあるものの地下鉄やバスでは通いづらい立地にある中で、彼らは登校には自家用車や予約団体タクシーを利用することが多いほか、徒歩通学するために引っ越す学生もいるという。そして彼らが、一般的に漢族学校より学費の高い朝鮮族学校で、朝鮮語を学んでいる。こうしたことから経済的に裕福な者が多いことが窺い知れる。大連市は中国内消費 4 位の都市であり、生活水準の高さゆえに以前の朝鮮族は住めなかったが、朝鮮族の経済的地位が向上し、今は住めるようになったことが確認できる。それが現在の大連市朝鮮族人口増加に繋がっている。

また他朝鮮族コミュニティのインタビューの中でも朝鮮族の経済的地位が向上していることを表す事例が散見される。例えば、大連市朝鮮族老人協会のメンバーの中にはソウルに行ったことがない人はいない（【老人】）。また老人協会の活動にはバスや自動車ですくから毎日通う人もいるという（【老人】）。また大連市には人脈作りに役立ち、スポンサーとなる企業家協会も存在している（【文化】）。

大連市が経済的に優れ、その住みやすさゆえに朝鮮族の移民や在住を促進していることは先に述べたが、経済都市大連市の中でもさらに経済的に恵まれた朝鮮族家庭が多いと思われ、朝鮮族コミュニティの形成に経済的要因が一役買い、それが大連市朝鮮族学校で実施される、大連市独自の高水準な朝鮮語・中国語バイリンガル教育にも結びついていると言えるだろう。

しかしその一方で次のような限界点も見えてくる。延辺地域における朝鮮族は、学歴が高いほど中国語を使用する傾向が強く、学歴が高いほど漢族学校を選択する割合が高くなっている（尹貞姫 2005）。大連市においても同様の傾向が見られる。理由としては、中国の大学に行かせるには、朝鮮族族学校に通わせるのは不利に思われることや、中国は人脈社会のため、在校生数に圧倒的な差を持つ漢族学校で人脈を作らせたいことなどが挙げられる。

また泡崖朝鮮族老人協会訪問で得られた談話の中には、「内心は朝鮮族同士の結婚を望むものの、子や孫は漢族と結婚するのが大部分である」、「孫は幼稚園から漢族学校に通っており、孫とは漢語で話す」、「孫がわからないため、朝鮮語を嫌がる」、「文化はことばと違って継承可能であるが、だんだん民族文化も失われつつある」（以上、【泡崖】）というものがあつた¹⁸⁾。経済的裕福さが大連市朝鮮族学校の言語教育を支えている一方で、上のように、

18) 2016 年 9 月に大連市朝鮮族学校の学生を対象に実施したアンケート調査では、話す相手、話しかけられる相手と言語使用について質問をしている。データ分析の結果、話す場合も話しかけられる場合も祖父母に対して朝鮮語を用いる傾向が強いことが明らかになっているが（新井 2016）、これは朝鮮族学校に通う孫のケースであり、そうではないケースの場合は当然ながら朝鮮語は用いられず中国語のみのコミュニケーションになると考えられる。

経済的裕福さゆえに、漢族中心である中国社会で学校選択や言語継承、文化伝承の際に朝鮮族が朝鮮語を選択することのデメリットが見えてしまう¹⁹⁾。経済的裕福さが照らす、朝鮮族学校を始めとする朝鮮族コミュニティ内だけの活動の限界と言える²⁰⁾。

このように大連市は、延辺と同じ東北三省に位置するという近接性ゆえに朝鮮族の移動を促進し、経済都市という環境が、大連市朝鮮族学校における高水準の朝鮮語・中国語バイリンガル教育を支えている。延辺同様に全日制学校で延辺と同じ朝鮮語教科書を用いる一方で、延辺と異なるバイリンガル教育を行っているのは、大連市が延辺に近接した位置にありながら、延辺とは異なる位置にあることと平行的である。これらの環境が朝鮮族学校を始めとする朝鮮族コミュニティの活動を支える一方で、経済的裕福さがその限界を照らしている²¹⁾。

4. 華東朝鮮族週末学校

次に上海市を中心に展開する華東朝鮮族週末学校の事例を見る。上海市は中国南部に位置する中国最大の経済都市であるが、その上海市を中心に江蘇省、浙江省を合わせて華東地域と呼ぶ。近年、朝鮮族の経済力向上と共に、多くの朝鮮族がこの華東地域に注入しつつある。花井(2011)によると、1990年代から朝鮮族社会は大きな変動をして都市化が進んでおり、上海、江蘇、浙江には20~40代の朝鮮族が10~12万人いると言われている。中国に在住

19) 生越(2016)では「将来メリット」と「民族文化の継承」の大小関係で、民族学校に通わせる理由を説明しようとしている。在日コリアンは「将来メリット<民族文化の継承」であるが、大連市朝鮮族学校はその大小関係が異なる可能性が示唆される。非常に単純化されたモデルであるが、移民コミュニティの言語選択、学校選択の一般化・類型化する上で有効なモデルとなり得る。

なお筆者らは2016年9月に大連市朝鮮族学校で学生を対象にアンケート調査を実施した。「朝鮮語が上手な朝鮮族に対してどのような印象を持つか」という設問に対して「民族意識が強い人だと思う」と回答した調査票は15.5%であった一方で、「朝鮮語ができることが将来の自分のプラスになると思うか」という設問に86.0%が「思う」と回答している。大連市朝鮮族学校の学生にとって朝鮮語は民族文化・意識継承よりも将来のメリットであることがここからも示唆される。

20) 財力がなく才覚だけで生きる場合は漢族学校への進学を余儀なくされるが、親のビジネスで財力があり、様々な候補を模索できる場合は朝鮮族学校進学を選択肢に入れることができるとも考えられる。一定の経済力を備えた家庭の子どもがバイリンガル教育を志向する学校に入学するという点では、日本の中華学校と共通している。日本の中華学校の言語教育については陳於華(2014)に詳しい。日本の中華学校と比較することが、移民コミュニティにおける言語活動の一般化・類型化の一助となるかもしれない。

21) 本稿では朝鮮族学校や朝鮮族コミュニティに別途インタビューを行い、両者の関係について具体的に調査並びに分析するには至らなかった。しかし大連市朝鮮族文化芸術館が行う大連市朝鮮族民俗文化芸術節には大連市朝鮮族学校も協賛するなど、学校とコミュニティの協力も見られ、本稿のテーマである言語教育にも深く関わると思われる。今後、調査及び分析していきたい。

する朝鮮族が 183 万人と考えられているが、約 6%に当たる。

このように華東地域に朝鮮族が増加しつつあるものの、朝鮮族学校はなく、週末に朝鮮語や朝鮮文化を教授する週末学校が上海市を中心に存在する。華東朝鮮族週末学校、及びその前身である上海市朝鮮族週末学校については、花井(2014)、権艶美(2017)が調査分析を行っているほか、校長の論考である 박창근(2015)がある。また華東朝鮮族週末学校では朝鮮語文の HP を公開し、週末学校の趣旨や活動などを紹介していた²²⁾。本節ではこうした先行研究や HP の内容に加え、さらに筆者が 2019 年 9 月に参与観察した「華東朝鮮族週末学校浦東学区臨港学級開学式」で得た関係者へのインタビュー内容をまとめて²³⁾、華東朝鮮族週末学校の言語教育の現状と背景について述べる²⁴⁾。

4. 1. 華東朝鮮族週末学校概況

大規模移動が分散化を加速し、新たな居住地に移住した朝鮮族は、朝鮮族学校などの民族語教育機関の不在により、民族文化断絶の現実直面しているが、そうした事態に鑑み、2011 年 9 月 17 日に非営利教育機関として上海市朝鮮族週末学校が設立されたという²⁵⁾。「週末」という冠がつくように、週末土曜日のみの開講である。朝鮮族の人口が多くなく大都市ゆえに分散しているため、「学生の居住地の近くに学びの場を作る」という原則を堅持するため、翌年以降、上海市以外の周辺都市にも学級が設立され、現在は華東地域各所に点在（5 学区、12 分校）している²⁶⁾。各学級は幼児クラス（3 歳以上）と初等クラス（6 歳以上）から成り、学生数は草創期の 23 人から現在（調査時点、以下同様）は 339 人に至っている。クラス数も草創期の 2~3

22) 『우리말 배움터 汉语学习坊 Hua Dong Korean Weekend School』

(<http://www.swmbt.com> : 2019 年 9 月 14 日閲覧)。ただし 2021 年 3 月 28 日現在、当該 HP は公開が停止しており閲覧ができない。

23) 開学式の模様は 상하이방（上海房）「상하이 자유무역구 푸동 린강에 우리말 배움터 탄생（上海自由貿易区浦東臨港に韓国語の学び場誕生）」(<http://shanghaibang.com/shanghai/news.php?mode=view&num=58954> : 2021 年 1 月 23 日閲覧)でも確認できる。

24) 本節で、断りのない限りは、華東朝鮮族週末学校 HP または浦東学区臨港学級開学式インタビューからの引用であり、先行研究からの引用の場合は適宜明記する。

25) 花井(2014)によると、上海市朝鮮族週末学校の前身は、2010 年 10 月 16 日に延辺教育局と上海楊浦区教育局の支持と認可、復旦求是進修学院の協力を得て設立された「復旦求是進修学院朝鮮語班」である。設立者であり校長の朴昌根（박창근）氏は 1978 年に上海復旦大学に唯一の朝鮮族として進学し、その後は同大学で教員となった（権艶美 2017）。上海復旦大学国際問題研究院韓国研究センターの元教授であり、専攻はシステム学、韓国学であるが、朝鮮族の民族教育に取り組んでいる。

26) 2018 年 12 月現在、上海市内は闵行、大学城、九亭、浦東、嘉定の 5 学区であり、江蘇省に崑山、無錫、常州、蘇州、蘇州希望、太倉、花橋、浙江省に嘉興、寧波、紹興、義烏、諸暨の合計 12 分校が存在する。

から 51 に増加しており、1 クラスあたりの学生数は平均 7 人弱である。朝鮮族だけでなく非朝鮮族の入学申込も可能であり、過去に「漢族と朝鮮族の子女」、「朝鮮族とその他少数民族の子女」、韓国子女など多様な非朝鮮族の学生が在籍したこともあるという。教員数は草創期の 2 人から増加し、現在は 40~50 人である²⁷⁾。

4. 2. 朝鮮語及び朝鮮文化教育

それでは華東朝鮮族週末学校では、全日制学校ではなく週末学校という形態の中でどのような言語教育が実施されているのだろうか。また大連市朝鮮族学校の事例で見たように、地域の特徴が現れ、他地域とは異なるのだろうか。4. 2 節では華東朝鮮族週末学校の朝鮮語及び、朝鮮語と深く関連する朝鮮文化教育を概観する。

華東朝鮮族週末学校の授業は毎週土曜日に 2 時間の朝鮮語講義が実施される。そのため朝鮮語教育時間数は週 2 時間となり、当然ながら、朝鮮族学校に比べると学習時間数は少ない。幼児クラス(3 歳以上)と初等クラス(6 歳以上)に分かれるが、年齢は便宜上のものであり、学生の朝鮮語レベルに応じて選択可能であるという。幼児クラスは主に口語、初等クラスは主に文語を学び、初等クラス修了までに TOPIK (韓国語能力試験) 4 級(中級)水準が目標となる²⁸⁾。注目すべきは教科書であり、在外同胞財団から無料で提供される韓国教育部国立国際教育院発行『재외동포를 위한 한국어 (在外同胞のための韓国語)』を用いる²⁹⁾。つまり、学ぶのは韓国のことばであり、学生の親世代の朝鮮族が獲得、習得した北朝鮮のことばや延辺朝鮮語ではな

27) 華東朝鮮族学校では学校運営、授業運営に時間を要すること、教授の質向上のために学生の朝鮮語水準に透徹な理解が必須であることから、ボランティア教員を採用したことはない(박창근 2015)。そのことも一因なのか、近年、要件を満たす教員を集めるのに苦労しているという声も聞かれた。筆者が開学式を見学した浦東学区臨港学級の場合、2019 年度の幼児クラスは上海市内大学韓国語学科副教授、初等クラスは上海市内大学学部 4 年生が担当し、共に朝鮮族の女性であった。今回筆者が調査した限りでは韓国人教員の採用した事例はなかった。

28) TOPIK は Test of Proficiency in Korean の略称であり、大韓民国政府(教育省)が認定、実施する。4 級は中級に該当し、評価基準は「公共施設の利用や社会的関係の維持に必要な言語(ハングル)機能を遂行することができ、一般的な業務に必要な機能を実行できる/ニュースや新聞をある程度理解でき、一般業務に必要な言語(ハングル)が使用可能/よく使われる慣用句や代表的な韓国文化に対する理解をもとに社会・文化的な内容の文章を理解でき、使用できる」となっている(韓国語能力試験 HP (<https://www.kref.or.jp/examination> : 2020 年 11 月 21 日閲覧)より)。

29) 在外同胞財団から華東朝鮮族週末学校への支援は教科書提供以外にもあり、一例として教員を年に 1 回、1 週間韓国に招待し、朝鮮半島の歴史や文化の研修を行うという。詳細は権艶美(2017)を参照のこと。

いということである³⁰⁾。それは学習目標に TOPIK が基準となっていることとも一致する。この学習朝鮮語については、大連市朝鮮族学校が延辺発行の教科書を用いているのとは対照的であり、各朝鮮族学校、朝鮮族週末学校の特徴と言えるだろう。華東朝鮮族週末学校でも初期には延辺で出版された朝鮮語教科書を使用していたが、民族や次世代の利益を考え、「標準的な朝鮮語」を学べる韓国のもを現在は使用しているという(박창근 2015)。大連市朝鮮族学校は全日制学校として高度かつ均衡的な朝鮮語・中国語バイリンガル教育を実施している一方で、華東朝鮮族週末学校は週末学校という制限の中で、中級程度の朝鮮語能力習得を目標にしている。華東地域の朝鮮族の言語教育全体で考えると、日常生活で用いる中国語と週末学校、家庭で用いる朝鮮語(中級程度目標)という偏重的なバイリンガル教育になっていると言える。

それでは華東朝鮮族週末学校に通う学生たちの実際の言語使用はどのようなものになるだろうか。浦東学区臨港学級開学式での説明によると、入学者の 90%が朝鮮語学習の経験がないためハングルの学習から始めるが、授業は 99%朝鮮語を用いるという³¹⁾。また開学式では教員より、学校での学習時間が非常に限られているため、家庭では朝鮮語を用いるようにしてほしいという発言があった。上海市の場合、家庭外で高い中国語普通話能力を有することができるので、家庭では朝鮮語を用いることを要望していた³²⁾。こうした教員の要望にも、朝鮮族の新たな居住地となった上海市という環境の特徴が反映されていることが示唆される。

30) 박창근(2015)によると、学生募集時に「週末学校で学ぶ朝鮮語はどのようなものか」は非常によく聞かれるという。筆者が見学した浦東学区臨港学級の開学式でも保護者から同様の質問が出て、この旨の回答をしていた。박창근(2015)や保護者の質問では、学校における教育言語に焦点を当てていると考えられるが、こうした変種の使い分けや使用意識については今後検討していきたい。

なお本稿査読者より「第一世代が遼寧省や黒龍江省出身である場合、慶尚道方言が現れることがあるほか、延辺の中でも凉水鎮などでは忠清道方言が現れる。つまり、南北両方の地域方言が現れる」というコメントを頂戴した。教育言語だけでなく日常言語も今後の分析の対象である。

31) 筆者は実際の授業を見学する機会がなかったが、実際に授業を見学し、担当教員にインタビューを行った権艶美(2017)では下記のように記されており、開学式での説明と一致している。なお「ウリマル」は朝鮮語で「私たちのことば＝朝鮮語」の意である。

週末学校の教員は子どもの民族語の能力の状況について、「最初に華東朝鮮族週末学校に入学してきた子どもたちは漢民族の子どもと同じです。ウリマルが話せなくて、家族でよく使われている簡単な単語しか聞き取れない子どもがほとんどでした」と説明した。授業の中では、教員が民族語で質問しても、子どもはよく中国語で答えていた。そのため、教員は生徒に「私がこの教室で授業する時間には、中国語が使えないので、ウリマルで教えてください」と言った。

権艶美(2017: 75)

32) 普通話とは標準中国語を指す。

また課外活動としてキムチづくり、キムパップ（韓国海苔巻き）づくり、韓服体験などがある。権艶美(2017)では「テキスト通りの民族語の学習以外に、週末学校は礼儀、歌、舞踊、伝統楽器などの教育もして」いることが述べられており、その目的として「授業の趣味性を高くしつつ、子どもの学習意欲を高めるため」、「上海では子どもが朝鮮族の伝統文化と接触するチャンスが少ないため、週末学校を通して、伝統文化についての理解を深める目的」を挙げている。朝鮮語の授業においても、「上海での民族文化への接触も少ないため、昔話、ことわざ、劇を通して、民族語能力と民族文化への接触を意図的に増やす教授内容を作った」という（権艶美 2017）。上海市という環境の中で、その地域に合わせた朝鮮語及び朝鮮文化教育が実施されていることがわかる。また授業時間以外にも朗読大会や運動会などの文化行事を不定期に開催しており、下の表 3 にあるように一部文化行事は華東朝鮮族週末学校の学生以外にも開放している。華東朝鮮族週末学校が朝鮮語及び朝鮮文化教育という役割を担いつつ、朝鮮族コミュニティ形成の役割も果たそうとしていることが窺い知れる。

表 3 華東朝鮮族週末学校実施文化行事³³⁾

名称	時期	場所	参加者	回数	延人数	備考
華東朝鮮族 児童特技自慢大会	2012 年か ら毎年 5 月	虹口文化 院, 上海韓 国学校	華東朝鮮 族週末学 校学生, 父 母, 教師な ど	7 回	1750 名余	外部朝鮮族 学生も参加 可能
朝鮮族児童 朗読大会	2017 年か ら毎年 11 月	松江大学 城学区教 室など	学級優秀 者及びそ の父母	2 回	257 名	その中で学 生 50 名. 別 の学校の学 生も参加可 能

4. 3. 上海市在住朝鮮族の背景

ここまで見てきたように、華東朝鮮族週末学校では、週末学校という形態で活動に制約がある中でも、韓国から支援を受け、朝鮮語及び朝鮮文化教育を実施している。教授する朝鮮語は、実利性を重視して、韓国のそれであり、教員が学生家族の協力も要望しながら朝鮮語教育を行っている。また朝鮮文化との接触を増やすために、課外活動も積極的に行い朝鮮文化教育を進める

33) 華東朝鮮族週末学校 HP 掲載のものを一部抜粋し、筆者が朝鮮語から日本語に翻訳した。

ほか、一部行事を公開し華東地域朝鮮族コミュニティの形成も図ろうとしている。延辺や大連市朝鮮族学校とは異なる華東朝鮮族週末学校の朝鮮語及び朝鮮文化教育を志向しているが、その背景にあるものは何であろうか。4.3節ではそれを探る。

延辺や大連市の朝鮮族学校と比較して、華東朝鮮族週末学校の最たる特徴としては、延辺や北朝鮮の朝鮮語ではなく、韓国の朝鮮語を教えていることが挙げられるだろう。上海市は中国一の経済都市であり、韓国系企業も多く進出しているが、そこで用いられるのは延辺や北朝鮮の朝鮮語ではなく、韓国の朝鮮語である。そのため、韓国の朝鮮語を学んだ方が実利性は高く、華東朝鮮族学校では韓国の朝鮮語が教授される。上海市の経済都市という特徴が華東朝鮮族学校の言語教育に反映されていると言える。

また上海市は東シナ海沿岸に位置する国際都市であり、外国や外国語への意識も他地域より高いと考えられる。権艶美(2017)が華東朝鮮族週末学校教員へ実施したインタビューの中で、中国で大学の入学試験に落ちる可能性が高く韓国に留学したほうがいいからという理由で高級中学3年生が朝鮮語を勉強しにきた事例が報告されている。同じ沿岸都市の大連市同様に、将来の選択肢として留学を含めることができるのも国際都市であるという点が大きく働いているからであろう。박창근(2015)でも華東朝鮮族週末学校に入学させる選択肢の賢明さとして多言語教育を挙げているが³⁴⁾、上海市の国際都市という背景ゆえに多言語教育のメリットが見えやすいものと考えられる³⁵⁾。また権艶美(2017)では、上海市では中国政府側の干渉及び民族保護政策が緩いからこそ、韓国本土からの支援を受けることが可能になったと述べられている。これも国際都市である上海市ならではの特徴と言える。

このように上海市は経済都市、国際都市という性格ゆえに、韓国の朝鮮語教育、多言語教育の実利性が高く、それを反映した朝鮮語教育を華東朝鮮族週末学校が実施している。また華東朝鮮族週末学校では朝鮮語教育だけを行

34) 박창근(2015)では朝鮮族の子女を IQ が高いクラスと低いクラスに分けて以下のように述べている。実利性を重視した、非常に印象的な説明であるためここに引用する。

私たちの経験によれば、IQ が高い子どもたちの場合、中国語と英語を学ぶのと同時に韓国語をさらに学ぶのはそれほど負担にならない。一方、IQ が低い子どもたちの場合、学校で教える中国語や英語で比較優位を占めるのはほとんど不可能であるため、むしろ中国語と英語を学ぶと同時に韓国語をしっかりと学ぶのは中韓間に形成された大規模市場で言語的比較優位を確保し活躍することができる素晴らしい選択であるはずだ。

(박창근 2015: 232, 筆者訳)

35) 花井(2014)では「今後上海に朝鮮族学校ができたら子どもをどの学校に通わせたいか」というアンケート調査を実施し、「朝鮮族学校」18名、「漢族学校」11名、「国際学校」9名という結果を得ており、「漢族学校」と「国際学校」が約半数を占めていることから、朝鮮族の朝鮮語を含めた言語教育に対する意識の高さを示唆している。

うのではなく、朝鮮語教育の一環や課外授業、活動で朝鮮文化教育も実施し、一部行事を学校内の活動に留めるのではなく外部にも開放することで華東地域朝鮮族コミュニティの形成も図っている。上海市を中心とする華東地域に移動する朝鮮族の数は今後増加し、華東朝鮮族週末学校が果たす役割はますます大きくなっていくと考えられる。その一方で、朝鮮族の増加、及び学校需要の拡大にもかかわらず、2021年1月現在、全日制の朝鮮族学校は設立されていない。花井(2014)、権艶美(2017)では上海市朝鮮族学校設立の動きも紹介されているが、設立に至っていないのが現状である³⁶⁾。この理由として第一に考えられるのは、上海市が漢族社会であることであろう。上海市は中国一の経済都市であるが、それを支えるのは中国のマジョリティである漢族である。大連市でも同様であるが、中国の人脈社会で成功する最も典型的な道は漢族学校に通い人脈を作ることである。中国一の経済都市ゆえに競争も激しい上海市ではその傾向がより強く、朝鮮族学校が設立されたとしても実際の入学者は少ないことが予想される。박창근(2015)でも上海市在住朝鮮族はその子どもを朝鮮族学校に通わせることが少ないのではないかとということが示唆されている。同じ経済都市でありながら、朝鮮族学校があり、そこに通う子どもがいる大連市とは大きく異なるが、朝鮮族がまだ相対的に少ない中国南部の上海市では大連市よりも漢族社会への適合が求められるのではないかと考えられる。経済都市であり南部にある上海市が漢族に支えられているため、子どもを中国一の経済都市、上海市で成功させるために漢族学校に通わせるケースが大半となる。先に高級中学3年生の朝鮮族が華東朝鮮族週末学校に入学して朝鮮語を勉強し始めた事例を引用したが、「中国で大学の入学試験に落ちる可能性が高く韓国に留学したほうがいいから」朝鮮語を学ぶことを通じて、改善の策であることがわかる。なお権艶美(2017)でも子どもが週末学校という形態で朝鮮語を学ぶ背景として「上海では学業の競争が激しいので、それ以上の時間を取れない状況」が挙げられている。こうした状況を踏まえて、上海市での朝鮮語及び朝鮮文化教育は週末学校という形態が担当するに留まっていると言えるだろう。また上海市という漢族社会で実利性を優先した場合、朝鮮族コミュニティを形成するのは難しく、実際、朝鮮族コミュニティが他地域に比べると十分に形成されていない。そのため、週末学校が朝鮮族コミュニティ形成という役割を担おうとしていると考えられる。

このように、経済都市、国際都市の上海市の特徴を生かして、華東朝鮮族

36) 権艶美(2017)によると、「上海仁成朝漢双語学校」が設立される見込みとなったことが2017年に報じられたというが、2021年1月現在設立は確認されていない。筆者が中国や韓国の検索サイトで中国語、朝鮮語の検索もしたが、該当するものは見られなかった(2021年1月27日実施)。

週末学校では延辺や大連市とは異なる、言語教育が実施されている一方で、経済都市と表裏一体にある漢族社会で生き抜くために、朝鮮語学習が最優先されるものではなく次善のものとなっている³⁷⁾。大連市では経済的裕福さが朝鮮族コミュニティ内だけの活動の限界を照らしていることを指摘したが、上海市についても同様である。むしろ上海市は漢族社会への適合がより求められ、週末学校という形態での教育、朝鮮族コミュニティ形成の少なさに繋がっていると言える。

5. 他地域の朝鮮族学校

ここまで大連市朝鮮族学校、及び華東朝鮮族週末学校の事例を扱い、その背景を探ってきた。両学校共に、朝鮮族が移住したその地域の特徴を反映した言語教育が実施されていることが明らかになったが、他の地域ではどのような言語教育が行われているのだろうか。本節では先行研究の記述をもとに、他地域の朝鮮族学校及びそれに相当する学校の言語教育を概観する。

南玉瓊(2018)では様々な地域の朝鮮族コミュニティにおける民族教育が紹介されている。山東省青島市にある西園庄朝鮮族小学校の授業は朝鮮語、中国語、英語の3言語で行われている。数学と中国語、英語は青島市の統一教材を使い、その他の科目は延辺教育出版社から出版される朝鮮語教材を使用しているという(以上、南玉瓊 2018: 96)。朝鮮語、中国語、英語を用いる点、教科書をその地域のもので延辺のものを併用しているという点で大連市朝鮮族学校と類似している。その一方で、大連市朝鮮族学校では小学校の段階では朝鮮語が主たる教授言語であり、教科書は大連市発行のものを主に用い、延辺の教科書は限られるという点で異なる。大連市朝鮮族学校は使用教授言語が、朝鮮語が多いのに対して、西園庄朝鮮族小学校は使用教材が、朝鮮語が多いことがわかる。西園庄朝鮮族小学校の場合、学生は中学校に進学する時から漢族学校に編入するため、中国語の言語能力を漢族学校入学レベルまで上げる必要があるため、中国語を教授言語として用いる必要があるのではないかと考えられる。大連市朝鮮族学校は初級中学、高級中学も併設されているため、その必要が少ないという地域による学校形態の違いが大きく影響する。その一方で、朝鮮族学校として朝鮮語を用いた言語活動を実施するために、教科書は朝鮮語教材を使用しているものと推察される。南玉瓊(2018)によると、西園庄朝鮮族小学校設立者の教育方針は「朝鮮族の誇りと民族言語である朝鮮語教育を重視しつつ、同時に、漢族を中心とした中国社

37) こうした状況にもかかわらず、華東朝鮮族週末学校に子どもを通わせる父母がどのような人たちであるかは今後詳しい調査が必要である。筆者が前述の開学式に参加した際は、日本で博士学位を取得した研究者の朝鮮族の男性が父母として参席していた。一定の社会的地位にある親が、子の将来の選択肢を増やすために漢族学校だけでなく朝鮮族週末学校にも通わせている事例が多いのではないかと考えられる。

会への適応ができるようにする」ことであり、大連市朝鮮族学校との比較により、そうした教育方針が実際に実施されていることが確認される。

また南玉瓊(2018)では河北省廊坊市三河市に位置する燕郊鎮の朝鮮族コミュニティについても調査を行っている。燕郊鎮は北京市中心から約 37km 慣れたところにあり、北京市圏に朝鮮族学校がない中、燕郊鎮では三河市光大学校国際部朝鮮語クラスで朝鮮語を学習することができる。この朝鮮語クラスには小学校、初級中学、高級中学があり、卒業すると「高校の卒業証明書」が授与されるという。光大学校朝鮮語クラスでは、中国語は国家规定に沿って、人民教育出版社刊の教材が使われている。英語は毎週 8 時限、ネイティブ教師と中国人教師が担当し、朝鮮語は毎週 11 時限、韓国人教師と中国人教師が担当している³⁸⁾。朝鮮語の教材は、延辺朝鮮族教育出版社刊の朝鮮語文の小学校用教材が利用されているが、韓国の図書、たとえば絵本や物語本等も併用されている。また、特設科目として民族伝統文化概況、文化娯楽活動などが設置されている（以上、南玉瓊 2018: 127-128）。光大学校朝鮮語クラスは英語と朝鮮語に非常の多く時間が割かれており、朝鮮語を「外国語」として学んでいるところに、大連市朝鮮族学校の高度なバイリンガル教育との共通点が見られる。また朝鮮語の教材も延辺のものを使用しているという点でも共通している。南玉瓊(2018)では、三河市光大学校国際部朝鮮語クラスの学生募集文を興味深い事例として紹介し、次のように示唆的な考察をしている。「也就是说我们光大学校孩子接受的韩语教育是和老家的朝鲜族学校的韩语教育一致的（すなわち、我々光大学校の学生が受ける韓国語教育は故郷の朝鮮族学校の韓国語教育と一致する）」という文章は、東北の公立朝鮮族学校で教えられる朝鮮語の内容と一致することをアピールする一方で、朝鮮語ではなく韓国語という単語を使って韓国語の実用性もアピールしている（以上、南玉瓊 2018: 128）。韓国の朝鮮語をアピールするという点では華東朝鮮族週末学校と共通している。三河市光大学校は北京市圏にあるが、中国の首都であり国際都市である北京市の地域的特徴が、上海市同様に反映されていると考えられる。一方で、東北地域との近接性から東北の公立朝鮮族学校との共通性もアピールしており、実際に大連市朝鮮族学校との共通点が見られる。首都、国際都市、東北地域近接都市という地域的特徴が言語教育に現れている。

本節では先行研究の記述を手掛かりに、他地域の朝鮮族学校及びそれに相当するものを見てきた。青島市の西園庄朝鮮族学校では「漢族を中心とした中国社会への適応」を方針とし、北京市圏の三河市光大学校では首都、国際

38) 南玉瓊(2018)では朝鮮語クラスのカリキュラムも掲載されているが、どの学年のものかは記載されていない。

都市, 東北地域近接都市という地理的特徴が現れた言語教育が成されている。大連市朝鮮族学校, 華東朝鮮族週末学校と同様に所在する地域の特徴が反映され, 朝鮮族の言語教育の多様性として現れていることが明らかになった³⁹⁾。

6. 朝鮮族学校言語教育多様性の背景

ここまで朝鮮族学校の言語教育について概観してきた。筆者らが調査した大連市朝鮮族学校, 華東朝鮮族週末学校の事例に加えて, 先行研究で記述された他朝鮮族学校の事例を比較することで, 朝鮮族学校の言語教育の多様性が明らかになったと言える。それではこうした多様性の背景にあるものは何であろうか。本節では言語と社会の関係に焦点を当て, その背景について社会言語学的考察を行う。

新井他(2019)は延吉市, 通化市, 大連市という3地域を対象に, 各朝鮮族学校を共通のフィールドとして朝鮮族言語使用・意識のアンケート調査を学生に実施した。そして計量分析を行った結果, 朝鮮語志向は通化市, 大連市よりも延吉市が強い地域差, 男性より女性の方が強いという性別差を観察した。またその中でも, 延吉市, 通化市より大連市で, 男性より女性でソウルのことばが志向されるという地域差, 性別差を指摘し, 朝鮮族言語使用・意識の多様性を明らかにしている。概略をまとめると以下図1のようになる。

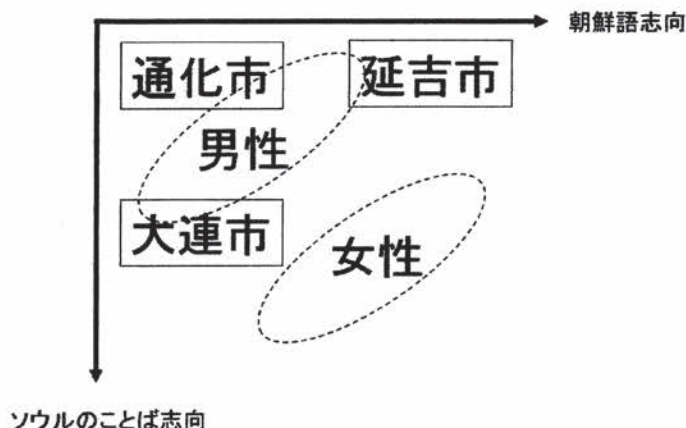


図1 朝鮮族の言語使用・意識概略図 (新井他 2019: 132)

39) 南玉瓊(2018)のほかに, 趙貴花(2016)では北京市に位置する北京韓国語学校の事例を紹介している。具体的な言語教育を扱ったものではないが, 教員や受講者のインタビューから, 「公教育機関として朝鮮族学校がない移動地において子どもたちが「民族語」を学べる新たな学校づくりへの挑戦とその一定の可能性を提示している」と述べており, 参考になる部分が多い。また近年の朝鮮族の主な移住先の一つとして知られる深圳市の事例については南玉瓊(2021)で言及されており, 深圳朝鮮族週末学校では2人の韓国人教師が朝鮮語教育を行っているという。朝鮮族言語教育の多様性を考える上で, 非常に興味深い事例であり, 他地域も含めて今後研究の対象としていきたい。

さらに新井他(2019)ではその多様性の背景を探り、各学校における教授言語の差，入学背景による差，行動・思考による差（「外国語」を学ぶ意識，両親への言語行動，韓国大衆文化への接触，家庭方針）を挙げ，中国漢族社会へ適合という「社会化(Socialization)」で統一的に説明できるモデルを提示した（図2参照）。

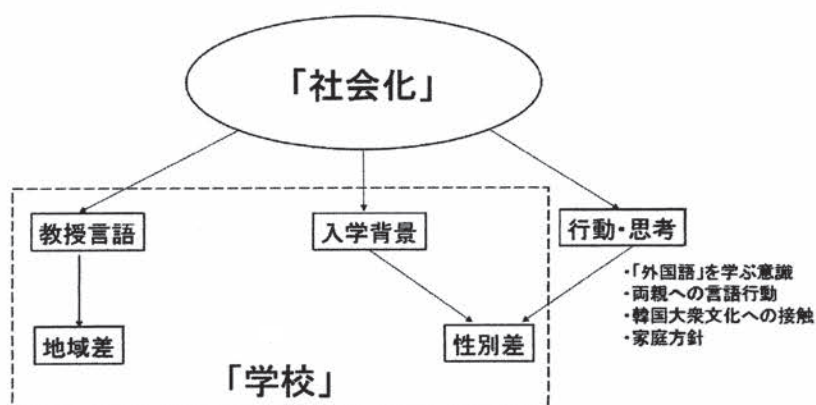


図2 朝鮮族言語使用・意識の多様性を説明するモデル
(新井他 2019: 138)

朝鮮族学校の言語教育を質的に分析した本稿とは異なり，新井他(2019)では，朝鮮族学校に通う学生を対象にアンケート調査を実施し量的分析することで朝鮮族言語使用・意識の多様性を明らかにし，モデルを導出している。その過程では，本稿で扱う朝鮮族学校の言語教育が言語使用・意識に影響を与える可能性を指摘している。例えば，教授言語における朝鮮語の割合の順序と朝鮮語志向の順序が一致していることから（延吉市＞大連市＞通化市），各学校における教授言語が，その学校が位置する各地域の朝鮮語言語使用・意識に大きな影響を与え地域差を生んでいることを示唆している。順序の一致だけでは相関関係の可能性もあるが，3節でも見たように，延辺と大連市の朝鮮族学校の朝鮮語，中国語授業時間数を比較したとき，大連市朝鮮族学校はより均衡的なバイリンガル環境にある。授業時間も考慮に入れると，朝鮮語授業時間の割合がより高い延辺が朝鮮語志向がより強くなると考えられ，言語教授言語が言語選択意識に影響を与え多様性を生むという因果関係がより適当と言える。新井他(2019)は地域差に関する考察が教授言語のみを扱っており，性別差に比べると不十分であるが，本稿で各朝鮮族学校の言語教育を，その地域的特徴と合わせて考察することで，言語と社会の関係がより明確に示される。

また新井他(2019)では，朝鮮語志向及びソウルのことば志向は女性が強い

という性別差があることについて、韓流という韓国大衆文化への関心及び接触は女性の方が多いためであるとして行動・思考の違いであることを指摘している。大連市はソウルから地理的（交通的）にも近く、韓国大衆文化も流入しやすいと考えられることから、行動・思考が性別差だけでなく地域差にも現れたものと推察される。本稿では朝鮮族言語教育の地域的多様性を明らかにしてきたが、言語使用・意識の多様性とも深く関わるものであり、その背景には、言語使用・意識と同様に「社会化」があるのではないかと考える。

「社会化」とは「個人と他者との相互作用を通じて、自己を発展させ、その社会（集団）に適合的な行動様式を獲得する過程」（宮島編 2003）である。新井他(2019)では朝鮮族の言語使用・意識には地域差、性別差があることが明らかになったが、その地域、性別における、あるいはそこにおいて求められる中国社会での活躍や進出という「社会化」の度合いの影響を受けていることが示唆されている。学校や社会という集団によって、マイノリティである朝鮮族個人の使用・意識が、マジョリティである中国漢族社会に適合的な言語使用・意識に変化していく過程と考えることができる⁴⁰⁾。この「社会化」の観点から、朝鮮族言語教育の多様性を捉える。本稿で扱った朝鮮族学校の言語教育の内容をまとめると次の表 4 のようになる。

表 4 各地域朝鮮族学校の比較⁴¹⁾

	大連市	北京市圏	青島市	上海市
多言語教育	均衡的	均衡的	均衡的	偏重的
朝鮮語教科書	延辺	延辺	延辺	韓国
朝鮮語名称	朝鮮語	朝鮮語／韓国語	朝鮮語	韓国語
学校形態	全日制	全日制	全日制 (小学校)	週末学校

大連市朝鮮族学校は全日制的朝鮮族学校として、高度かつ均衡的な朝鮮語、中国語バイリンガル教育を実施している。また朝鮮語教育で用いられる教科書は延辺のものである。大連市は延辺と異なりながらも、東北地域に位置し延辺と近接していることと平行的である。対照的に上海市を中心とする華東朝鮮族週末学校は週に 1 度開講される週末学校という形態であり、中国語を主に使用する学生が朝鮮語を副次的に学ぶ偏重的なものである。韓国政府

40) Arai, et al. (2020)では「社会化」には言語に関するものとして「言語的社会化(Language Socialization)」があり、文法や語彙、音韻など言語形式だけでなく、言語使用・意識という社会言語学テーマにも拡大できることから、朝鮮族言語使用・意識の多様性にみえる「社会化」も言語的社会化に含めることを論じている。

41) 便宜のため、地域名をラベルしているが、各地域で 1 つずつの朝鮮語学校しか扱っていないことを申し添える。地域差ではなく学校差である可能性は排除できない。

の支援を受けて、韓国で発行された在外同胞用の教科書を用い、韓国の朝鮮語を学習する。前述の通り、上海市が漢族社会を中心とする経済都市であり国際都市であることが言語教育に反映されている。南玉瓊(2018)で扱われた北京市圏、青島市の朝鮮族学校及び相当する学校は大連市と上海市の中間的な性格を備えていると言える。三河市光大学校国際部朝鮮語クラスは、中国の首都であり国際都市である北京市圏にあり「韓国語」を称する一方で、東北地域との近接性から東北の公立朝鮮族学校との共通性として「朝鮮語」とも称している。また青島市の西園庄朝鮮族小学校は、小学校までの全日制であり中学校進学時に漢族学校に編入する必要がある。学校形態は大連市と上海市の中間にあり、中学校進学後は中国語を中心に使用することが余儀なくされる。

こうした各地域の特徴を反映した言語教育の多様性を、「社会化」から捉えたと次のように説明が可能になるのではないかと考えられる。上海市は漢族社会を中心とする経済都市であり、中国漢族社会への適合という「社会化」が強く求められる。そのため、朝鮮族学校の形態は週末学校に留まっている。一方で国際都市である点では「社会化」の度合いが低い側面もあり、韓国政府の支援のもと、韓国の朝鮮語を教育できる環境にある。大連市も上海市同様に沿岸都市である上、韓国との近接性から韓国大衆文化が流入しやすい。さらに東北三省一の経済都市であるものの、延辺と地理的に近く、上海市と比較すると、求められる「社会化」の度合いは低いと言える⁴²⁾。そして「上海市>大連市」という「社会化」の度合いの順序が各地域の朝鮮族の言語教育に現れている。

なお南玉瓊(2018)で扱われた2地域についても簡単に述べる。北京市は中国の首都であり強い「社会化」が求められる一方で、国際都市であるため「社会化」の低い部分があり、「朝鮮語」だけではなく「韓国語」という名称を使うことができている。青島市は大連市同様に沿岸都市であり、韓国と近接しているものの、大連市と異なり、延辺を含む東北地域にないことから、中国漢族社会への「社会化」が求められると考える。それは学校の教育方針にも「朝鮮族の誇りと民族言語である朝鮮語教育を重視しつつ、同時に、漢族を中心とした中国社会への適応ができるようにする」と現れており、まさに「社会化」が示唆される。「社会化」の観点ではこれら2地域は上海市と大連市の中間的な立位置にあり、それが朝鮮族学校及び相当する学校の中間的な性格に反映されているのだろう⁴³⁾。このように本稿で地域的特徴として言及

42) 新井他(2019)では延吉市、通化市、大連市の「社会化」の度合いを考察し、「通化市>大連市>延吉市」であるとして論を進めている。

43) この2地域を始めとする他地域の朝鮮族学校については今後更なる調査研究を要する。本稿では簡単な推測を提示するに留める。

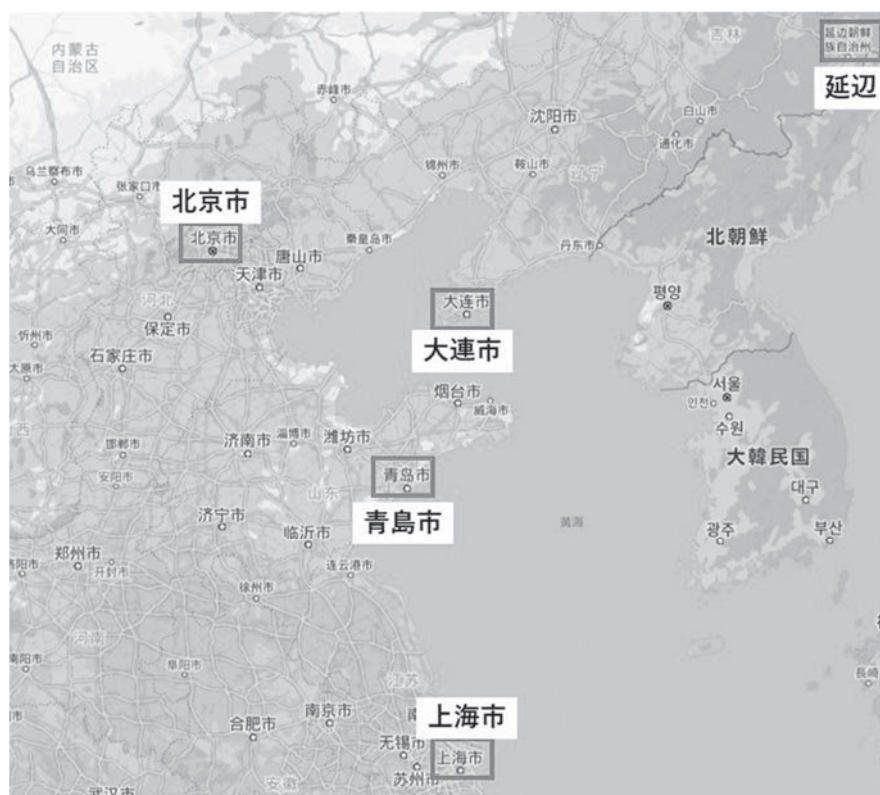
された、経済都市、国際都市、首都（漢族社会）、東北地域との近接という共存する性質を統合して「社会化」という枠組みで一元的に考えられる⁴⁴⁾。「社会化」というモデルは、朝鮮族学校学生たちの言語使用・意識だけでなく朝鮮族学校の言語教育を説明するうえでも有効であることが示唆される⁴⁵⁾。

44) このように、本稿では様々な要因を「社会化」という枠組みで一元的に捉えられるという立場であるが、一方で各要因と「社会化」の関係、働き方の大小は異なり、各要因について詳細な検討を要する。今後の課題としたい。

45) 本稿で扱った朝鮮族学校の所在地域と延辺の位置関係をまとめると別図（Google Map(<https://www.google.co.jp/maps/> : 2021年1月29日閲覧)をもとに筆者が作成)のようになる。本稿では、言語教育の多様性の背景にある「社会化」の度合いを「上海市＞北京市、青島市＞大連市」と考えたが、別図から明らかなように朝鮮族自治州である延辺からの距離と同順序になる点が非常に興味深い。本稿で扱った地域は交通機関が発達し、地域間の移動も比較的容易であり、移動にかかる時間と地理的な距離はほぼ比例するため、時間的距離と空間的距離を一括して捉えてよい。延辺は少数民族の自治州として中国漢族社会への適合度が、他地域より低い、その延辺からの距離と「社会化」の度合いが比例し、延辺朝鮮族自治州から遠いほど、漢族社会への適合が求められることになる。本稿で繰り返し言及される「東北地域との近接性」が「社会化」において非常に大きな要因であることが示唆される。オンラインの発達により時空間を越えたコミュニケーションが可能になっているが、人の移動及び在住にはやはり地理的な距離が大きな影響を与ええるかもしれない。ただし交通上直接アクセスできず、時間的距離と空間的距離が一致しない地域も対象とした場合、どのようになるかは検討が必要であるため、本稿では注での指摘に留める。例えば、新井他(2019)では東北地域吉林省通化市の朝鮮族学校についても調査を行い、延吉市、大連市より「社会化」の程度が高いと述べている。調査時の2017年当時通化市へのアクセス手段は限られており、他地域からの空間的距離とは対照的に時間的距離は遠いものであった。

なお本節では言語教育の地域的多様性を「社会化」の観点から探ったが、性別についても最後に一考を加える。権艶美(2017)は華東朝鮮族週末学校に子どもを通わせる親にインタビューを実施しているが、その中で両親共に朝鮮族であるにもかかわらず、父親は週末学校に通わせることを反対し、母親が積極的に通わせることを主張した事例を紹介している。両親共に延辺出身であり、父親は上海市の韓国系企業で仕事をして、中国語が上手に使えず苦労が多かったという。韓国で生活していないので朝鮮語を習う必要がないとも話したとのことである。この事例もまさに「社会化」から説明可能であり、漢族社会での活躍をより期待される男性は、「社会化」が求められるため、中国語を志向し、子どもに朝鮮語を学ばせる選択肢を除外する。一方で、女性求められる「社会化」の度合いが相対的に低いため、朝鮮語を志向し、自身の子どもに朝鮮語を学ぶ機会を与えようとしている。

このように朝鮮族の言語教育の背景には、言語使用・意識と同様に、「社会化」が考えられる。朝鮮族学校学生の言語使用・意識の量的研究を行うことで教授言語、入学背景、行動・思考の背景にある「社会化」を明らかにしたが(図2, 新井他 2019 参照), 各地域の特徴を十分に分析できなかった。しかし同じ朝鮮族学校をフィールドとしつつも、言語教育に焦点を当て、社会言語学的観点から質的研究を実施することで、各朝鮮族学校が位置する地



別図 本稿で扱った朝鮮族学校所在地域と延辺

域の特徴が反映されていることがわかり、「社会化」を構成する地域的要因が明らかになったと言える。現在、様々な地域に移住する朝鮮族であるが、移住先の地域的要因に応じて、つまり各地域で求められる「社会化」の度合いに応じて、多様な言語教育を実施しているのではないかと考えられる。朝鮮族を研究する上で「社会化」というモデルをどのように適用していくかは今後も課題であるが、その「社会化」を考察、検討する上で本稿の論議は有効である。また質的、量的研究を組み合わせることで朝鮮族の研究を進展させる契機ともなり得る。本稿で行った、こうした取組は朝鮮族だけではなく移民コミュニティにおける言語活動の一般化・類型化に資するものも少なくないと考えられる。

7. おわりに

本稿では、朝鮮族の意識や根幹に大きな影響を与えると考えられる言語教育に焦点を当て、その多様性を探った。筆者らが調査した大連市朝鮮族学校、華東朝鮮族週末学校の事例のほかに、先行研究で紹介された地域の事例を比較分析することにより、朝鮮族学校言語教育の多様性を明らかにした。さらにその背景について社会言語学的に考察し、言語使用・意識と同様に、中国漢族社会への適合という「社会化」が大きな要因として潜んでいることを示した。「社会化」は朝鮮族を始めとした移民コミュニティの言語使用・意識や言語教育を説明する上で有効なモデルである可能性が改めて示された。

しかし本稿では多くの課題が残されたことも事実である。いくつかの朝鮮族学校の事例を扱ったが、先行研究からの引用や調査が不足している箇所が多く見受けられる。まだ一般化には不十分であり、今後別の朝鮮族学校を対象に調査研究を行う必要がある。また「社会化」というモデルで一元的な説明を試みているが、本稿の地域的特徴を始めとして「社会化」には様々な要因が含まれていることは明らかであり、今後の実証、論証のために更なる検討が必要である。また本稿執筆時の2021年現在、新型コロナウイルス感染症が世界規模で拡大し、中国の朝鮮族学校も多くでオンライン化を余儀なくされていた。また中国では一部科目科目において中国教育庁発行の統一教科書が義務化され、少数民族の言語使用が制限されているが、朝鮮族も例外ではない。こうした社会情勢の変化が朝鮮族の言語使用・意識や言語教育にどのような影響を与えていくかも注視する必要がある。

こうした課題を克服することによって朝鮮族ひいては移民コミュニティの言語とそれを取り巻く社会の関係について更なる究明が可能になることが期待される。

《付記・謝辞》

本研究は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「移

民の継承語とエスニックアイデンティティに関する社会言語学的研究」および JSPS 科研費（15H0512, 19K13168）の成果の一部である。

また本稿は第 2 回朝鮮語及び周辺諸言語研究会(2016)及び第 23 回東京移民言語フォーラム(2019)の発表内容に加除修正を加えたものである。会の席で建設的なコメントを下された諸先生方、そして本稿に有益なコメントをくださった査読者の先生に、この場を借りてお礼申し上げる。もちろん、コメントを十分に反映できなかった部分も含めて、本稿における全ての誤りは筆者に帰するものである。

《参考文献》

- 新井保裕(2016)「大連市朝鮮族学校における言語使用・意識調査の中間報告—朝鮮族の共通性と多様性を求めて—」第 15 回東京移民言語フォーラム口頭発表資料(未公刊)
- 新井保裕・生越直樹・孫蓮花・李東哲(2019)「中国朝鮮族言語使用・意識の多様性に関する研究—朝鮮族学校でのアンケート調査—」『社会言語科学』22(1)
- 岡本雅享(1999)『中国の少数民族教育と言語政策』社会評論社
- 小川佳万(2001)『社会主義中国における少数民族教育—「民族平等」理念の展開—』東信堂
- 生越直樹(2016)「大連の朝鮮族コミュニティの特徴について」第 14 回東京移民言語フォーラム口頭発表資料(未公刊)
- 韓景旭(2001)『韓国・朝鮮系中国人＝朝鮮族』中国書店
- 菅野裕臣・長璋吉(1982)「延辺朝鮮族自治州訪問方向」『朝鮮学報』103
- 権艶美(2017)「上海朝鮮族コミュニティにおける文化・言語の継承—華東朝鮮族週末学校の事例から—」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』129
- 新保敦子編(2014)『中国エスニック・マイノリティの家族—変容と文化継承をめぐって』国際書院
- 高木丈也(2020)「中国における民族教育の現状 東北 3 省における朝鮮族高校での調査から」『KEIO SFC JOURNAL』19(2)
- 高崎宗司(1996)『中国朝鮮族 歴史・生活・文化・民族教育』明石書店
- 趙貴花(2016)『移動する人びとの教育と言語 中国朝鮮族に関するエスノグラフィー』三元社
- 陳於華(2014)「中華学校の言語教育と在校生の言語能力・言語使用及びアイデンティティの形成—バイリンガル教育の限界と可能性—」第 11 回東京移民言語フォーラム口頭発表資料(未公刊)
- 南玉瓊(2018)『第 2 のコリアン・ディアスポラ 中国朝鮮族の国内移動とコミュニティ形成』創土社
- 南玉瓊(2021)「中国朝鮮族の国内移動と言語教育の多様化」第 32 回ひと・ことばフォーラム指定討論資料(未公刊)
- 花井みわ(2011)「中国朝鮮族の人口移動と教育—1990 年以後の延辺朝鮮族自治州を中心

として一」『早稲田大学社会科学総合研究』11(3)

花井みわ(2014)「上海における朝鮮族の仕事・生活と民族文化継承」新保敦子編所収

宮島喬編(2003)『岩波小辞典 社会学』岩波書店

尹貞姫(2005)「現代中国朝鮮族における言語問題と学校選択」『ことばの科学』18

李塚畛(鎌田光登訳)(1998)『中国朝鮮族の教育文化史』コリア評論社

黄有福(2012)『走近中国少数民族丛书 朝鲜族』辽宁省民族出版社

박갑수(2013)『제외동포 교육과 한국어교육』역락

박창근(2015)『한반도 평화와 통일』인터박스

Arai, Y., N. Ogoshi, L. Sun and D. Li (2020) "A Sociolinguistic Study of Koreans in China: The 'Language Socialization' of Koreans in China" *Asian and African Languages and Linguistics* 14.

중국조선족학교 언어교육의 다양성에 관한 사회언어학적연구
—대련시조선족학교 및 화동조선족주말학교의 사례들을 중심으로—

아라이 야스히로
분쿄가쿠인대학

중국조선족은 한반도에 뿌리를 두고 있으며 한국어와 중국어의 이중언어화자라고 생각된다. 조선족은 학술적으로 주목을 받아 왔는데 연변조선족자치주 거주자를 대상으로 한 연구가 많아, 다른 지역에 주목하거나 복수 지역을 비교한 연구는 그리 많지 않다. 조선족은 이동성을 특징으로 하는 것으로 알려져 있으며, 거주 지역이 다양하여집에 따라 의식이나 생활양식에도 영향을 미칠 수가 있다. 그러므로 본고에서는 조선족의 의식이나 근간에 큰 영향을 끼치는 언어교육에 초점을 맞추어, 복수 지역의 다양성을 찾았다. 필자들이 조사한 대련시조선족학교, 화동조선족주말학교의 사례들 이외에도 선행연구에서 소개된 지역(북경, 청도)의 사례들을 비교함으로써 조선족학교 언어교육의 다양성을 밝혀내었다. 다양성의 배경에 대하여 사회언어학적으로 고찰한 결과, 각 조선족학교가 위치하는 지역들이 가지는 경제도시, 국제도시, 수도(한족사회), 동북지방과의 근접이라는 지역적 특징들이 반영됨을 알 수 있었다. 언어사용 및 의식과 마찬가지로 언어교육의 배경에도 중국한족사회로의 적합[適合]이라는 ‘사회화(Socialization)’가 보여지며, 이러한 지역적 특징들도 일원적으로 파악할 있음을 시사하였다. 또한 ‘사회화’가 조선족을 비롯한 이민 커뮤니티의 언어사용 및 의식이나 언어교육을 설명하는 데에 유효한 모델일 가능성도 시사되었다.